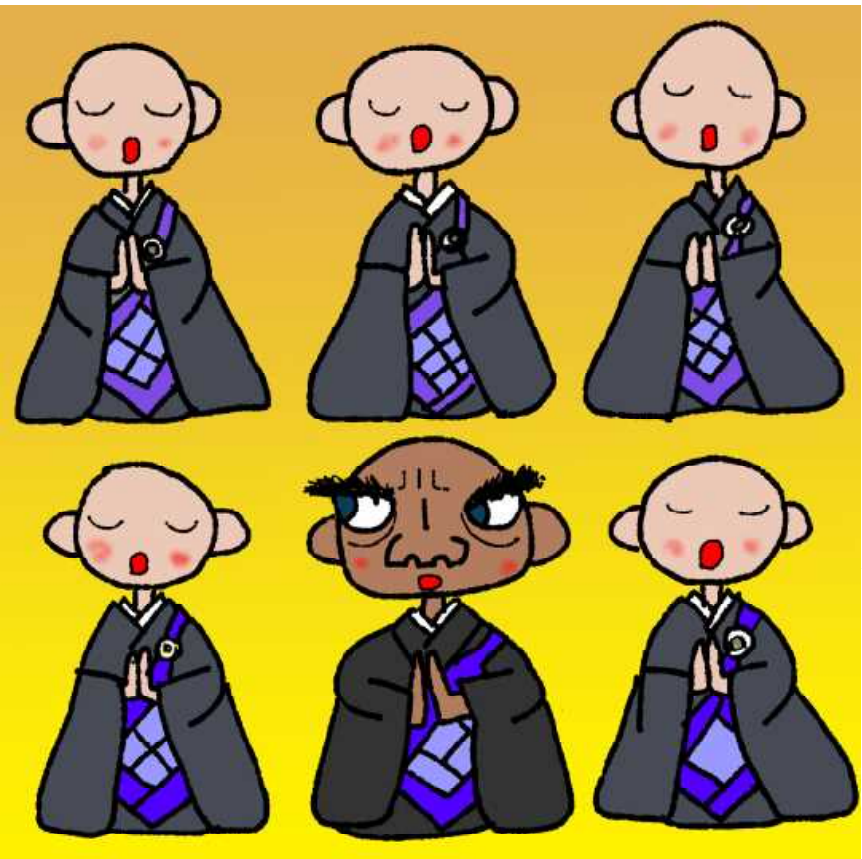


幽霊封じの千人坊主・江津市桜江町谷住郷

令和4年3月22日

収録・解説・酒井 董美<sup>たまたよし</sup> イラスト・福本 隆男



語り手 島田朝子さん（大正12年生まれ）  
収録・昭和46年8月18日

あらすじ

昔、幽霊の出るといふ大きな古い寺があつたそうなの。日本全国から、坊さんを千人ほど集めてお経を読めば、幽霊は出なくなるという事になつたが、どうしても一人、坊さんがたりません。いよいよお経が始まるというようになつても、どうしてもたりませんので、裏山に来てゐる木樵りを雇うてきて、お坊さんにしてしました。そして、千人の坊さんの中で、この木樵りだけ、たった一人、違つてお経を読んでいます。それは、  
ハワーシヤ、コーレン<sup>シヤ</sup>、背戸ヘコーソ 藤葛立テコソ

行キタリ  
千人坊主ノターリーカー  
ニー  
ショウトテー 頭巾脱ギヤ  
毛ガデル .....  
こつこつと自分のお経をばかりにお経に読んでおられましたが、どうとう幽霊、恐ろしくなつたのでしよう

か、出なくなつたそうです。はい、ぼつちり。

解説

昭和四十六年の収録である。当時の筆者は三十六歳。仁多郡横田町立島上中学校に勤務していた筆者であるが、この年の夏休みに、江津市跡市町でお住まいだつた民話研究会の第一人者で江津市を中心に口承文芸を収録され、お若い時分に『邑智郡誌』を執筆なさつてゐた森脇太一先生のお誘いを受けて、ご一緒に録音機を携えて、現地の民話を中心に収録に励んだ思い出の一コマが、この江津市桜江町谷住郷での島田朝子さん訪問だつた。

お目にかかつたのはこのときの一回限りであつたが、発音のはつきりした言葉で、気持ちよく話していただいた印象は、今もはつきりと残つてゐる。話してくださつたタイトルは次の六話であつた。名称については今日では使ひにくい名称もあるが、口承文芸としてよく用いられてきたもので、内容を表すのに分かりやすいのであえて使用する事をお許しいただきたい。

①三人カタワの関所破り

②川を挟んだつんぼ同士の話

③神歌好きな一家

④愚か婿（一打ちか半殺し）

⑤長い名の子ども

⑥幽霊封じの千人坊主

この年以後に教育学部・田中塾一教授を団長とする島根大学昔話研究会が同町を中心に民話調査を行ったことがあり、たしか筆者もその一員に加つたことがあつたが、調査班の割り振りの関係で谷住郷地区へは行けず、別な地区を担当した。谷住郷地区へ出かけたメンバーが、島田朝子さんをお訪ねしたおり、島田さんが筆者との思い出を語つておられ、「よろしく伝えてください」と言われた旨を聞き、懐かしく思い出させていたただいたのである。  
肝心の「幽霊封じの千人坊主」を取り上げるのを置いて、思い出に終始したが、話そのものは閑敬吾『日本昔話大成』には出ていない。しかし、内容から見て笑話に属することはお分かりいただけると思ふ。